

---

日本近世煎茶書の研究：  
漢籍受容と文人趣味の展開を中心に  
〔一橋大学審査博士学位論文〕

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程

LD171012

梁 旭璋

論文要旨

本論文は、近世における煎茶文化が、如何に中国の喫茶文化と繋がり、如何に中国茶書の影響を受けたのかという問題を、煎茶書を通して解明しようとするものである。本研究は文献研究を中心に論述を展開し、江戸時代の煎茶書を総合的に検討し、日本の煎茶書と中国の茶書との受容関係を考察することを目的とする。

本論文の検討により、先行研究では不十分であった煎茶書史料の基礎研究を深め、新たな論点を提示することができた。煎茶書の調査と分析によって、一次資料の研究を充実させた。基礎研究の充実は、新たな知見の蓄積と創出に繋がるため、後継の研究者にとって有益な資料である。また、本研究は従来の研究では欠けていた中国の茶書史料を重視した。中国の茶文化研究の成果を積極的に煎茶書研究に取り入れることによって、日本の研究者に新しい視点と刺激を与えることができた。さらに、従来の研究では詳細に検討されなかった作品に対して専門的な研究を行った。その結果、茶書の受容、茶書の伝来経過、茶人の嗜癖、茶人の交遊、漢詩集の茶詩など、多角的な見解を得ることができた。今後の研究に価値のある新視点を提示することができた。つづいて、各章の概要は以下の通りである。

第一章「日本における煎茶書研究の現状」では、先行研究によって、煎茶の語

---

義を確認した上で、本研究の研究対象となる煎茶書の範囲を定めた。また、楳林忠男の先行研究をふまえ、煎茶書研究における史料不足という問題を捉え、新資料の検討が急務であることを指摘した。さらに、長谷川瀟々居、森本信光、筒井絃一、麓和善、守屋雅史など過去の研究者によって行われた煎茶書研究の成果と不十分な点を検討した。最後に、新発見の煎茶書の提示と紹介をした。

第二章「江戸時代における煎茶書の全体像」では、煎茶書とその書誌情報に対して分類と分析を行い、刊行時間、作者など、多角的な観点から江戸時代の煎茶書の特徴を総合的に把握し、煎茶書の発展と変遷の過程を詳細に整理した。まず、煎茶書が江戸中期から集中的に現れ、江戸後期になると繁栄期を迎えたことを指摘した。次に、煎茶書の作者や編集者は、江戸、京都、大坂、尾張の出身者が多く、経済と文化の繁盛した大都市を中心に現れ、漢文素養の高い庶民出身の人がほとんどであり、煎茶書は武士階級向けではなく、庶民向けの読物であったことを指摘した。また、煎茶書の文体と刊写と書型からみれば、漢籍から受けた影響が大きいことが明らかであり、時代が下るとともに、読みやすさと運びやすさを重視した作品が増えたことを明らかにすることができた。さらに、煎茶文化の流行拡大とともに、茶器と茶席の仕様図を載せた作品が増加したが、これは煎茶書の趣味性と実用性がますます重視されたことによることを指摘した。そのほか、煎茶書の刊記を整理して版元を調査した結果、煎茶書刊行の盛況は出版業の盛況に関係していたことが分かった。最後に、いままでの研究では注目されなかった散逸煎茶書について新しい情報を提示した。

第三章「煎茶書の源流をたどる」は、いままで日本の煎茶書研究に欠けていた中国の喫茶文化史の視点から、煎茶書の源流をさかのぼって明代の茶書と茶文化について論じた。明代後期に大量の煎茶書が集中的に刊行されたことを明らかにした。また、製茶法と喫茶法の発展と変遷により、葉茶の製造技術が発達となり、泡茶法が中国の主流の飲み方となったことを指摘した。そして、唐代の陸羽と盧仝を代表とした茶人の著した詩文によって、喫茶に高雅な精神性が寄託され、明代の隠逸生活を好んだ文人は、この唐代の喫茶の精神性を積極的に受け継いで、明代の喫茶法に浸透させて文人茶を成し遂げたことを指摘した。最後に、

---

文人茶は明代の文人集団によって流行が拡大し、文人趣味として日常生活と融合されたことを明らかにした。

第四章「煎茶書にみる中国茶書と喫茶文化の受容」では、第三章の研究を踏まえて日本の煎茶書について検討した。そして、煎茶書の序跋を検討し、煎茶書的大量刊行の背景と日本の茶人の執筆動機について考察することができた。その結果、江戸中期の茶の湯において拝金主義的傾向が強まったため、喫茶の趣味が低俗化したことが明らかになった。そして、日本の茶人は積極的に中国から伝来した茶書を学び、喫茶精神の一新を図ったことが明らかになった。また、煎茶書の内容を考察することで、それが明代の茶書から影響を受けていたことが明らかになり、明代の茶人の製茶法と泡茶法を積極的に学んだことも明らかになった。

第五章「大枝流芳の茶書に関する研究」では、過去の研究でまだ検討されていない大枝流芳の『青湾茶話』を事例に、中国茶書の受容状況を検討した。まず、『青湾茶話』が、『説郛』の中に収録されている茶書を始めとして、大量の中国茶書を参考したことが明らかになった。また、作者の人物と経歴を調べた結果、中国の隠棲好きの文人との共通点が多いことを明らかにすることができた。また、大枝流芳の『青湾茶話』によって青湾の美水が名声を高めたことを明らかにした。最後に、『雅遊漫録』との関係性を考察した上で、『青湾茶話』の刊行は大坂の出版業者の助力を受けていたことを明らかにすることができた。

第六章「大典禅師の煎茶書に関する研究」では、大典禅師を事例として論じた。大典禅師は江戸中期の煎茶書の編著に積極的に参与したことを明らかにした。『茶経詳説』と『煎茶訣』は、それぞれ唐代と清代の代表的な喫茶法を記載して内容を互いに補い合っている。この両書によって中国の喫茶法の変遷過程が日本に伝わった。『茶経詳説』は、中国茶書の経典である『茶経』の最初の和訳本である。本書の刊行によって『茶経』の普及がおおいに促進された。また、『煎茶訣』の刊行によって、中国清代の喫茶法が紹介された。これらが日本の茶人に多大な刺激を与え、その視野を広げたことは明らかである。最後に、大典禅師の交遊関係について考察し、後世の茶人が如何に大典禅師を評価したのかを論じ、大典禅

---

師による煎茶普及への努力と貢献を高く評価すべきだと指摘した。

第七章「上田秋成の煎茶書に関する研究」は、上田秋成の煎茶書を事例に論じた。『清風瑣言』と『茶痕醉言』を通して中国茶書の理論を積極的に取り入れたことを明らかにすることができた。また、上田秋成が提唱した喫茶法から、水の選び方、花香茶への賛否などを例として取り上げたが、彼は中国茶書から中国文人の考え方を積極的に吸収していた。そして、明代の嗜癖文化の発生と原因について検討し、明代の文人が如何に嗜癖を通して「清」という高潔な人柄を求めたのかを明らかにした。そのうえで、上田秋成の性格がそのような明代の文人と共通点が多く、中国の文人と近い価値観を持った人物であったことを指摘した。以上より、彼は煎茶を褒めたり、点茶を批判したりすることを通して「清」を求めている、と結論づけた。

第八章「陳元輔の煎茶書に関する研究」は、『枕山樓茶略』の発見と伝来の経過および作者陳元輔の身分考察について論じた。まず、清代の茶書『枕山樓茶略』の日本で発見された経過について検討をした。そして、本書の内容を考察した上で、日本の茶人に如何に影響を与えたかを明らかにした。また、従来の研究では、陳元輔の人物と経歴については不明であったが、『枕山樓詩集』、『枕山樓課兒詩話』、『中山詩文集』などを通して、陳元輔の出身地、年齢、職業と交遊関係を明らかにした。とくに、琉球王国の朝貢使程順則との交遊関係に注目し、程順則が生涯に五回の清国への渡航を行い、福建省に滞在した際に陳元輔の弟子となり、彼と親密な関係を持っていたことを明らかにした。それらを踏まえ、『枕山樓茶略』は程順則の手を経て日本に伝来した可能性が高い、という結論を導いた。

第九章「大典禪師の漢詩集に関する研究」では、大典禪師の漢詩集を通して、煎茶書研究における不足していた情報を補足することを試みた。まず、大典禪師の代表的な漢詩集『昨非集』、『小雲棲稿』、『小雲棲詠物詩』、『北禪詩草』、『北禪遺草』を考察した上で、詩集から詠茶詩を洗い出し、これらの詠茶詩の解説を通して煎茶席の姿を明らかにした。また、茶席の同席者の身分確認を通して大典禪師の交遊関係を解明した。さらに、宇野明霞、片山北海、聞中浄復を代表的な交遊対象として取り上げて大典の各時期の詠茶詩について考察し、それによって、大

---

典禪師の喫茶交遊の日常を明らかにした。最後に、詠茶詩の整理と分析によって新しい資料を発見することができた。このように、煎茶書研究における史料不足の問題について、漢詩集の補足資料としての研究価値を示した。

資料編「葉雋の煎茶書に関する研究」では、寛政8年版と明治12年版の『煎茶訣』に対して翻訳と注釈を行った上で、従来の研究では注目されていなかった両版本の異同について考察と検討を行った。

以上のように、本研究は近世における煎茶書を通してその発展と変遷の過程を考察した。そして、日本の煎茶文化と中国の喫茶文化の間に共通点が多く存在したことを明らかにした。また、日本の煎茶書は、中国茶書に多大な影響を受けたことを解明し、また日本における独自の変容も成し遂げたことを明らかにした。さらに、日本の茶人は中国風の文人茶を積極的に受け容れることによって、喫茶交遊が活発化したことが明らかになった。